

# 山口県萩市山田二区における祝言の あいさつ

岡野信子

## ○はじめに

1. 対象地の地理的環境：旧城下町である萩市の南西部に位置し、中心部とは4～5 km離れている。山田地区は玉江川に沿った細長い集落で、九郎坊（クローボー）・殿河内（トプガーチ）（以上一区）、中河内（ナワガーチ）・田中（タナカ）（以上二区）の四集落がある。
2. 対象地の社会的経済的環境：現在の山田地区と玉江（タマエ）地区、木間（コマ）地区を合わせたものが旧山田村である。大正12年に萩町に合併、昭和7年の市政執行によって萩市山田地区となる。山田地区は城下町に隣接した農山村であった。
3. 生業：農業。多くは兼業農家で、萩市内や長門市への通勤者が多い。
4. 交通：地区内には二本の市道が通っている。交通機関としては、バスセンターから木間行きのバスがあって、一日二往復（朝・夕）走っている。
5. 人口：山田二区は59世帯、187人（1989年10月）で、1955年ごろから人口は次第に減少している。
6. 調査年月日：1990年10月31日  
午後3時～5時
7. 方言話者：中村ツチヨ 大正10年生（69歳）  
中川ハル 明治36年生（87歳）  
（旭村から嫁した女性）  
佐々木満子 大正12年生（67歳）  
山下ミドリ 大正14年生（65歳）  
主たる話者は中村ツチヨ氏である。
8. 調査者、調査場所、調査方法：佐々木家の縁がわで岡野信子が聞き取りをした。なお、この調査には、萩市郷土博物館学芸員の清水清幸氏が同道して下さり、調査を助けて下さった。また山田地区にお邪魔する前に、萩市平安古（ヒヤコ）の吉松茂氏から町中での祝言のあいさつをご教示いただき、これを予備調査とした。

## I. 結納授受のあいさつ

### 1. 仲人が新婦の家に結納を持参した時のあいさつ

○ホンジツワ オヒガラモ ヨロシク、マコトニ オメデト ゴザエ  
マス。コアタビ ゴリョーケハ エンダンガ メデタク ト下ノイマ  
シテ ユイノーノ シチオ ジサン イタシマシタ。イクヒサジク  
メデタク オーサヌ ヲダサエマセ。本日はお日柄もよろしく、まこ  
とにおめでとうございます。このたびご両家の縁談がめでたく調いま  
して結納の品を持参致しました。幾久しくめでたくお納めくださいま  
せ。（老男仲人→娘の父親）〈かしこまり〉

### 2. 仲人のあいさつに答えて

○イクヒサジク オウケイタシマス。オホネオリニ ヨリマシテ ホン  
ト ニ リョーエンニ メクマレ アリガト ゴザエマシタ。ホン  
ジツワ マタ ゴデーネーニ ユイノーオ オモチクダサエマシテ  
アリガト ゴザエマシタ。下 ゾ ゴンゴトモ ヨロシユ オホ  
ヲ イシマス。幾久しくお受け致します。お骨折りによりまして本当に  
良縁に恵まれ、ありがとうございます。本日はまたご丁寧に結納を  
お持ちくださりましてありがとうございます。どうぞ今後ともよろ  
しく願います。（娘の父親→仲人）〈かしこまり〉

○ツツシンデ オウケイタシマス。謹しんでお受け致します。（花嫁と  
なる娘→仲人）〈かしこまり〉

これは「アリガタク オウケイタシマス」（ありがたくお受けいたし  
ます）とも言う。

（注）上記のあいさつは今日のもの、またもっとも格式ばったものである。  
仲人によって言いかたはさまざまであるが、「イクヒサジク」の一語は  
かならず言わねばならないと、教示者たちは言う。

## II. 嫁をもらう家の人へのお祝いのあいさつ

### 1. 路上で出会った近所の人のおあいさつ

○アチダニヤ オヨメサンガ キマリマシタ ゾーデ マー オメデト ー  
ゴザエマス。ゴアンシンデ ゴザエマス。お宅はお嫁さんがきまっ  
たそうで、まあ、おめでとうございます。御安心でございます。（老  
女→老女）〈丁寧〉

### 2. 近所の人のおあいさつに答えて

○オウダサマデ。アリガト ゴザエマス。おかげさまできまりました。

ありがとうございます。(老女→老女)〈丁寧〉

(注) 上記はややあらたまつたあいさつである。ごく親しい間柄なら以下のように言うこともある。

○アナタニヤ キマリマシタ テネー。アツシンシチャッタ ナー。お宅はお嫁さんがきまつたそうですねえ。安心なまつたなあ。(老女→中女)

○ハー オカゲデ。はい、おかげで。(中女→老女)

### Ⅲ. 嫁に出すことが決まった家の人へのお祝いのあいさつ

#### 1. 路上で出会った近所の人のお祝い

○オタダニヤ キマリマシタ テネー。オヌデトー ゴザエマス。お宅はご縁がきまつたそうですねえ。おめでとうございます。(老女→中女)〈やや丁寧〉

#### 2. あいさつに答えて

○ハー オカゲデ。アリガトー ゴザエマス。はあ、おかげで。ありがとうございます。(中女→老女)〈やや丁寧〉

(注) 話者たちは、「結婚式がすむまでは口に出して言わないのが普通。しいて言うとなれば」と前置きして、上記のようなあいさつを教示した。

### Ⅳ. 結婚式当日のあいさつ

#### 1. 披露宴に招かれて(親戚以外)

○ゴトーケニヤー オヌデトー ゴザエマス。ゴネンニ イリマシタ。  
〈祝儀を差出して〉コリヤー オシルシデ ゴザエマス。ご当家におかれてはおめでとうございます。ご丁寧にお招きいただきありがとうございます。これはお祝いの心ばかりのものでございます。(老女→ヒキウテ(裏の世話人))

#### 2. あいさつに答えて

○ゴネンニ イリマシタ。オタエガトー ゴザエマス。ご丁寧ななさりようで恐縮でございます。(ヒキウテの老男→老女)

(注) 上記は自宅で祝言をしていたころ(戦前)のあいさつで、「ヒキウテ」は「裏の世話人」である。この組内(クミウチ)では、嫁を迎えた家では組内の女性を招き、養子を迎えた家では男性を招いたという。もっともこの風習は各組内で異っていて、どちらのばあいにも夫婦を招く組内もあったという。

また現在はホテルや公民館で披露宴をするのが一般である。ホテルでは披露宴の会場の入口に新郎新婦、仲人、両親が並んでいるので、その前で「オヌデ下ーゴザエマス」とあいさつをするだけである。

## V. 結婚式後、姑が新婦を連れて近所へあいさつに回る時のあいさつ

### 1. 姑のあいさつ・嫁のあいさつ

○ウチニャー ヨヌ モライマシタカラ ー。ヨロシュー オネガイシマス。私方では嫁をもらいましたからねえ。よろしく願います。(姑→組内の家の主婦)〈やや丁寧〉

○フツツカモンデ ゴザエマスガ ヨロシュー オネガイシマス。不束者でございますが、よろしく願います。(新嫁→組内の主婦)

### 2. 組内の家の主婦のあいさつ

○コチラゴソ オセワニチリマス。こちらこそお世話になります。

(注)上記は当節のあいさつである。以前は姑は以下のようなあいさつをした。

○ウチニャー テマー イレマシタカラ ー。オセワニチリマス。

私方では手間を入れました(労働力をふやしました)からねえ。お世話になります。

○ママダキ モロダカラ ー。オネガイシマス。飯炊きをもらったからねえ。よろしく願います。

(注)「手間を入れた」、「飯炊きをもらった」というあいさつは、労働力がふえたと言っているが、家族が一人ふえた喜びの表現である。家族全員が労働力によって農業を営んでいた時代の人々の、「嫁迎え」の心情がうかがわれる。

萩市域では聞いていないが、豊浦郡内の諸地、たとえば粟野(アヲ)などには、「タビノヨメジョ」(旅の嫁女—他地から入った嫁)は、ジデマーリ(地下廻り—近所へのあいさつ廻り)のさいにワラジを贈る風習があった。「この土地の人にならせてください」という心持ちを託したのである。

## VI. 嫁を迎えた家の人へのあいさつ

### 1. 結婚式に出た近所の人、息子に嫁をもらった父親と路上で出会った時のあいさつ

○センジツワ タエヘン オゴツツオーニ ナリマシタ。オミヤゲドモ

タワサン アリガトー ゴザエマシタ。先日は大変ご馳走になりました。お土産などたくさんいただき、ありがとうございました。(老女→老男)〈丁寧〉

2. それに答えて

○オコトイー チカ ゴツグロー クダサエマシテ アリガトー ゴザエマシタ。ゴシユーギドモ ゴデーネーニ アリガトー ゴザエマシタ。ご多忙の中を御足労くださりましてありがとうございました。ご祝儀など、ご丁寧にありがとうございました。(老男→老女)〈丁寧〉

(注) 祝いのことばを受けた父親は、簡単に「ゴヌーワク カケマシタ」、「センジツワ ゴクローデ ゴザエマシタ」などと言うこともある。

3. 結婚式に招かれなかった人が、息子に嫁を迎えた父親・あるいは母親に出会った時のあいさつ

○アチタニヤ テマー ヨー シチヤツタ テデー。オヌデトー ゴザエマス。お宅にはお嫁さんが来られたそうですねえ。おめでとうございます。(老女→老女)

(注) これは以前のあいさつである。現在は聞かれない。

VII. ヒダナオシ(膝直し—嫁のはじめての里帰り)の時のあいさつ

「膝直し」には姑が同道する。この時には館入りの紅白の餅を「イチバンノ キリダヌ」(特大の重箱)に入れて持って行き、お土産として嫁の家の近所の家々に配る。膝直しの間に婿も来て、一晩泊って帰る。

1. 嫁の、舅へのあいさつ

○ヘーシャー イカセテ モライマス。それでは行かせてもらいます。

2. 嫁の実家での姑のあいさつ

○ゴムシン モーシマシテ カアーテ イタダキマシテ アリガトー ゴザエマシタ。ヒダナオシニ ツレテ キマシタカラ ヨロシユー オネガイ シマス。御無心を申しまして、私どもの願いをかなえていただきましてありがとうございました。「膝直し」(里帰り)に連れてきましたから、よろしく願います。(中女→中女)

3. 姑のあいさつに答える嫁の母親のあいさつ

○ゴクローデ ゴザエマシタ。お世話様でございました。(中女→中女)

VIII. ヒダナオシ(膝直し)で里帰りしていた嫁(新嫁)を婚家に送って行った母親のあいさつ

○セツジツワ ゴラローデ ゴザエマシタ。オミヤゲドモ アリ万トー  
ゴザエマシタ。先日は（膝直しに）お連れくださいませとお世話さ  
までございました。おみやげなどくださいませありがとうございます  
でした。

（注）母親が送って行く時も、紅白の餡入の餅をみやげに持参し、近所の  
家々にくばる。近年は簡便をよしとして、餛飩をやりとりすることはや  
まった。婚家先と実家はそれぞれ餛飩を用意して近隣に配っている。

#### IX. 結婚式後の仲人へのあいさつ

これについては答が得られなかった。老年女性たちは、結婚式後の初正  
月に仲人の家にあいさつに行ったことを記憶している。この時嫁の着てい  
く晴着は嫁を迎えた家で新調する。これを「オアキン キセル」と言った。  
嫁の実家では、娘が新調してもらった程度のものを、初孫のモモカマイリ  
（百日参り一生後百日めに氏神に参る習俗）の晴着として贈った。これも  
「オアキン キセル」と言った。

「オアキン」は「産衣」（うぶきぬ）であるから、娘の嫁ぎ先の初孫に  
着物を贈るのがむしろこのことばの本来の意味であろう。正月の訪問のさ  
いには、次のようなあいさつが交わされるのが普通であった。

○オメテトー ゴザエマス。おめでとうございます。（初正月の夫婦→  
仲人）

○オメテトー ゴザエマス。チカヨー モニャ フー。おめでとうござ  
います。仲良くしなくちゃねえ。（仲人→初正月の夫婦）

○ヨー シンポー シーザン 万。よく辛抱しなさいよ。（仲人→嫁）

聞き得たあいさつは以上であるが、結婚式や披露の形式が、ここ30年ぐ  
らいの間に著しく変化したため、人々の記憶も混乱しているように思えた。  
昔は嫁をつれて来た仲人が、「コチラフ ガフーニ ソメテ クダサイ」  
（こちらの家風に染めてください）などとあいさつをしたと、八十八歳の女  
性は語った。「ガフーニ ソマルマジャー ナカチカ」であったと老女は述  
懐した。「ウチノ ガフーニ アワンカラ」と離縁される嫁もあった。一方、  
嫁の方が「ミスガ クサイマセンカラ」（水が合いませんから——土地の気  
風や家風になじめませんから）と言って実家に帰ることもあったともいう。

1990.11.15

（梅光女学院大学）